

石川伍一日記を読む（一）

大里 浩秋

はじめに——山口さんの退職をお祝する

本号は山口建治教授の退職を記念する特集を組むとのことで、すでに退職している私にもお声がかかった。ありがたいことである。

山口さんは、鈴木陽一さんと共に、中国語学科創設を準備し、私を創設一年前から神奈川大学に呼んでくださった恩人である。私の方が年だけは上だが、就任以来ずっと、大学の諸事情を理解しつつ学科をどう運営すべきかをいち早く考えている、頼りになる先輩であった。ここでは、印象に残っていることの三つに触れて、山口さんへの感謝の言葉に代えたい。

一つは、神奈川大に來たばかりの頃、白楽駅周辺の簡単な構えの複数の飲み屋に何度も誘ってくれて、杯を重

ねながら、駆け出しの私を学校の雰囲気になじませようとあれこれ話をしてくれたことである。その後も二人で、あるいは学科の同僚と一緒にの席で何度も飲んだけれども、最初の頃の（今でも変わらないが）ぶっきらぼうながらやさしい山口さんとの出会いは貴重な思い出である。

二つには、学内共同研究助成を受けて戦前中国に置かれた日本租界に関する資料の有無と現地の今がどうなっているかを調査するチームに山口さんを無理やり誘って、二〇〇〇年に中国に出かけた時の失敗談である。南京第二歴史檔案館に行つて資料を見、蘇州では当時蘇州大学にいた厳明さんの協力を得て日本租界の迹をたどつたところまではよかったのだが、蘇州から上海に戻つた翌日には帰国という時に、孫安石さんと私の数時間後に一人で上海に戻つてきた山口さんのリコンファームが遅れてキャンセル待ちをするしかない状況に陥つた。翌朝早くに飛行場に駆け付けたもののチケットを手に入れるには至らず、結局私と孫さんは予定の飛行機に乗り、山口さんは一日遅れのチケットを買つて帰国する羽目になつたのである。先に日本に戻つた二人は、どうして山口さんの分のリコンファームと一緒にしなかつたか反省することしきり、あとに残された山口さんは腹立たしかつたに違いないがそれを表に出すことはなく、まもなく蘇州調査の報告書を提出してくれた。歴史が専門でないからと躊躇していた山口さんだが、力作をものしてくれたのに感心した（山口建治「蘇州日本租界と片倉製糸」、『人文研究』No.一四九）。

三つには、いつのことと限定することではなく、学科の主催で、あるいは人文学研究所の日中関係史研究会が開いたシンポジウムや講演会や映画会に、さらには非文字資料研究センターの研究会などに積極的に参加して、質問や意見を出してくれたことである。大学は社会に開かれた窓の役割を果たすべきだと言われて久しいながら、

相変わらず自分の研究に閉じこもる傾向が強い現状にあって、自分たちの研究成果や関心のありかをわかりやすく学生や市民に伝えたいとして私なども及ばずながら努めてきて、それが今や「社会貢献」の名で各種取り組まれるようになっているのはうれしいことで、山口さんがそうした動きの理解者として協力してくれたことをありがたいと感じてきた。

山口さん、これからも自分の信じる研究の道を頑固に進んでください。

以下には、山口さんが私の退職記念号（『人文研究』No.一八五）に論文を発表してくれたお返しのもりで、これまで長く関心を抱きながら十分には進めてこなかった石川伍一に関する研究を今後深めていく手がかりとして、彼の日記を紹介させていただきたいと思う。

一、石川伍一と彼の資料について

石川伍一（一八六六―一八九四）は、二十九年の生涯のうち十年をほぼ中国大陸ですごして、そのうち最初の二年は生活基盤を作ることに苦闘し、その後は荒尾精が主宰する漢口楽善堂の活動に参加して各地の地勢調査に従事、さらにその後は海軍の軍事情報収集に動員され、日清戦争勃発時海軍の指示で留まっていた天津で逮捕・処刑された人物である。世にいう「大陸浪人」のはしりの一人ともいうべき石川伍一（以下は伍一とする）は、私の郷里秋田県鹿角市十和田毛馬内（当時は、鹿角郡毛馬内村）で生まれたことから、同郷で同年生まれの

東洋史学者内藤湖南と並んで、私にとつては子供の頃から馴染みの人であり、いつかはこの人のことを詳しく調べてみたいと思っていた。

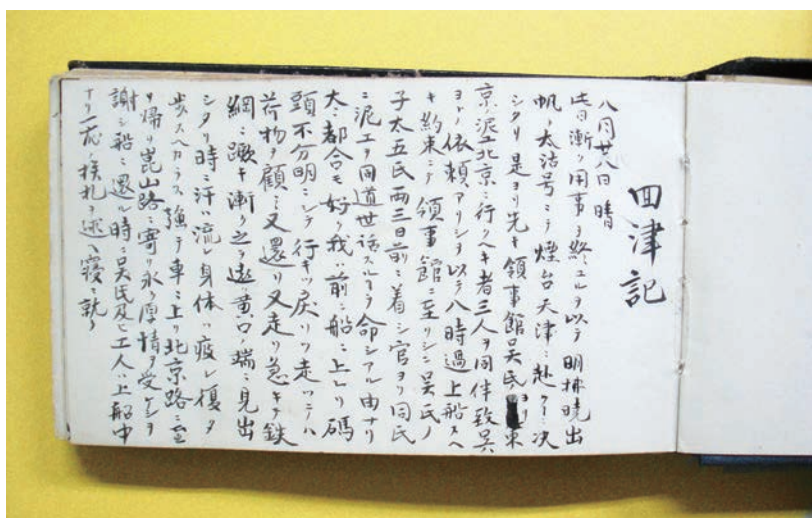
そして、長い時間を経て一九九八年になって、「石川伍一のこと」と題する小文を本誌に発表した（『人文研究』第一三五集）。その時に頼りにしたのは、主には伍一の弟漣平がまとめた『東亜の先覚石川伍一とその遺稿』（人文閣、昭和十八年）であるが、小文を出した翌年漣平の子息悌男氏夫人和子さんにお目にかかる機会に恵まれ、お宅に保存されていた伍一の自筆資料（日記や、論文・手紙の草稿など）を含む関連資料を見せていただき、二〇〇一年にはそれらを鹿角市先人顕彰館に寄贈していただくことになった。こうして、上記漣平著で一部引用されている伍一の原文を含む多量の関連資料に目を触れる機会を得ることになり、さらに、少しずつであるが、中国側で発行している複数の資料集の中にも伍一に関する資料があることを知った。

さて、上述の小文を書いてからかなりの時間が経って、今を置いて伍一のことに取り組む時間はないと感じるに至った。そこで、しばし本誌を借りて伍一関連資料を紹介しつつ、これまでの伍一理解の補充を試みることにしたい。その手始めは、伍一が中国に渡った年（明治十八年・一八八五年）から翌年にかけて綴った日記を解読して、それに解題を付すことである。今回はその（一）として明治十八年七月から十月までの分の解読文を載せ、以後、（二）と（三）と続け、（四）に解題をまとめて載せるつもりである。解読文は、原文中のカタカナはひらがなにし、人名を除く漢字の旧字体は新字体に改め、適宜句読点を付している。また、（一）によって文字の不足を補ったところがあり、解読できなかった文字は□で示した。

なお、解読に際して、常民文化研究所田上繁教授に援助していただいた。



日記が書き込まれた黒い薄皮風の手帖、留め金付き、横 13.6 センチ、縦 8.6 センチ、厚さ 1.5 センチ



日記の 1 ページ、明治十八年八月二十八日の日記

2 枚とも、鹿角市先人顕彰館・石井加奈子さんに撮影をお願いした

二、明治十八年七月から十月の日記

七月二十二日 水曜 曾根君依托の用件に依り、將に上海、長崎等の地に赴かんとす。今夕七時頃同昌の寓を發す。招商局碼頭より夾船に乘し海晏に上る。海晏は天津上海間航海船の中大にして佳、且つ快なるものなり。舟中に寝。

七月二十三日 曉起来出て、見るに、昨夜泊せし所と異なれり。蓋し寤寢中此に至るなり。之を問ふに果して深夜發して此に到ると。留まる十数刻下午五六頃發す。満潮なり。朦朧模糊の裡に太沽の村落と砲台とを望み、渤海に出つ。

七月二十四日 晝猴山島に至る。此辺無數の小島あり。近く一島上燈台を認む。蓋し先に過ぎし時見し所の者なり。五時頃煙台に着す。上陸上陸氏に面し書状及び東大人依頼の物件を届け、佐野及森、白須三君に会し書状を達し、及び談話少刻出て上船す。白須君送り至る途に松延領事に遭ふ。江口氏之事を聞くに長崎にて面会したる由。湾内に留まる一時間許にして發す。支那軍艦五艘碇泊し居れり。

七月二十五日 海天茫々、記すへきなし。

七月二十六日 八時頃陸を見る。十時過呉淞砲台前を過ぎ、申江を遡る途に日本郵便船に遭ふ。十二時頃上海に達す。直に崑山路に至り大浦氏に面し、礮硫〔ママ〕及び其他電信、陶器、茶等の事を談す。同氏右縷々遅延を弁し、曰く今日已に送れりと。同氏直に長崎行を決し予か行を止む。依りて予か托せられし事を同氏に托せ

り。

七月二十七日 天津に向て書状を海晏に托す。四時頃（盤城艦此日十一時長崎に向て出帆す。因て長崎於榮様の書状を吉井氏に托せり。夕暮吟香氏之宅に到り書状を渡し寝台之事を問ふ。同氏引受けざるに非ず、買人あらば売るへし、なければ引取るへしとの事なり。同氏松桃衣服店の事を言ふ。領事館佐藤氏に書状を達し委細を頼む。

七月二十八日 領事館に届をなし、芝罘より依頼されたる書籍を呉氏に送致す。松尾へ掛合ひ置きたり。此又呉氏に面会し、衣服店の事を言ふ。吟香氏に到り衣服店の方一時立替の事を托願せり。

海晏号由天津招商六十七時にして上海に達す。乃ち二晝夜と十九時間なり。河中に碇泊せしは十二時余なり。太沽号天津由怡和八十二時にして天津に達す。乃ち三晝夜と十時なり。河中に碇泊せしは二十四時なり。

在申江記事

始め（七月二十二日）予の天津を發するや、在滬一句崎陽周日事当さに整ひ、來復一月を費さざるの算なりき。而るに人事紛擾常に支吾、人生万事不如意、此際に鞠躬意を尽せども、更に其殊功も見へず。人に托したる事は兎角其の痛痒相関せざる故に、尽力怠慢勝にて一日三度其門に至て未だ成らさることもあり、実に腹立たしきこと可笑しきこと憂きこともあり。又世界は常に活動變遷すると同じく人事も移易して、今日の事は昨日の事と異なり、予定予想之外に出ること多し。左れば、予か長崎に行かざるも永く上海に滞在せしも、左程異しむへき

にあらず。七月の二十六日に上海に着し大浦氏に用事乃来滬の由を話す。同氏曰く、我帰らすんば此事決して弁せず、我帰らん、君の長崎の用事我代り尽く弁し来るへし。是に於て遂に長崎に行かぬこととなりぬ。其後聞けは家君も東君も未た在崎なりとかや、左らば前きに行きしならは、尊顔をも拝し高諭をも聴くことを得へかりしに、惜しきことしたり。上海在留は三十四日間なり。熱する時は午時九十四五度に上り、涼しきは八十五六度に下るもあり。左り乍ら常に風通しも能く家屋の建築も善かしか、至て凌きよかりし。晝前後十時より四時迄外出不出来、漸く朝夕奔走を為す余地を与ふるのみ。尚ほ流汗常に衣を湿ふす。公園は常に涼風あり、日の暑を洗ふへし。明月は高く清空に懸り、玲瓏水清からずと雖も河あり左右より来り前に合し淼渺大湖の如く、園趣画し得て妙なり。草花の珍美なる者極めて多し。音楽もあり、貴紳令嬢馬車を馳せ車を飛ばせ椅子を持ち来り満場隙地なきに至る。此三十四日之内十日は天津の回報を待ち、七日は競売の方に待ち、其外種々待ちたることあり。真に事をなしたるは十日位なるへし。

此間に高橋、尾本の両友は帰り、東洋学館は閉校し、牟田は金子に寄客と為り、長野は帰郷、外諸生離散、寺田君黒田参議に従て宜昌に赴く二句にして帰る。日本軍艦清輝来る。金田一氏に会ふを得たり。黄口に虎列刺にて死したる日人二三人ありたり。畠山より手紙あり大学校に入たりとのこと外種々の論、天津より家君の信を送来、東大人手紙之事に付き云々此弁解致し、安保のこと外云々。牟田君より返信此又天津より。東京舎弟に砲の事の調を頼み、畠山及片岸大兄に信を送る。郷里母君及安保に送信。

宗方より詩を贈る。

欧米回覧日記一冊を借り見る。記事詳細明瞭、自ら其地を履むか如し。世益の書なり。

回津記

八月二十八日 晴

此日漸く用事を終ゆるを以て、明払曉出帆の太沽号にて煙台、天津に赴くことに決したり。是より先き領事館吳氏より東京の泥工北京に行くへき者三人を同伴致（し）吳よとの依頼ありしを以て、八時過上船すへき約束にて領事館に至りしに、吳氏の子太五氏両三日前に着し、官より同氏に泥工を同道世話することを命しある由なり。大に都合も好く、我は前に船に上れり。碼頭不分明にして行きつ戻りつ走つては荷物を顧み、又還り又走り急ぎて鉄綱に蹶き、漸く之を遠く黄口の端に見出したり。時に汗は流れ身体は疲れ復た歩すへからず。強て車に上り北京路に至り、帰り崑山路に寄り永く厚情を受けしを謝し、船に還る時に吳氏及び工人は上船中なり。一応の挨拶を述べ寝に就く。

八月二十九日 此曉四時出帆せり。

此度は吳氏と同伴にて好き話相手なれば終日室内にて談話し、又た出て外を窺はす。此夜は余程風波荒く、船揺動し嘔吐を催す人もありたる由。

八月三十日

記すへきことなし。

八月三十一日 晴

前九時半頃煙台着。直に吳氏と領事館に至る。白須君と談話、上埜君、花坂君にも面す。氣候温和山水明媚、

実に羨しかりき。十一時半帰船、十二時頃出帆。仏軍艦八艘余碇泊し居れり。

九月一日 雨、曇

前日より風波起り沖に碇泊する能はず、進て河口内に泊す。前八時頃なり荷を移す、茶、砂糖なり。后四五時頃開行、遡る少許浅瀬に上げ泊す。

九月二日 晴

前六七時頃進行、此日は晝迄には天津に着すへしとて皆々勇み立ち朝飯をも食はず。船は兩三度も浅瀬に上げ、且つ天津より下流壺二里（日本里）の所に泊す。殆ど一時過なりし、夾船を雇ひ遡る。船行漫中にして引き走る。天津客舎（紫竹林同昌）に着したるは四五時なりき。此日は朝より気分悪頭重身熱出て事を為すに懶し、且食事は充分なるか故力出でず。客舎に着し、曾根君に面し諸方より書状を呈し、飯を食ひ寢に就き、熱の為に寝る能はず。此度の航海は総て百六時乃ち四晝夜と十時、太沽碇泊を除き八十二時間乃ち三晝夜と十時間、慢甚し。重慶、新南陞に追付れたり。

九月三日 晴

此日決算を追覧に供し、荷物を夫々方付け、曾根君の疑問等に答へ、気分不常早く就寝、食する能はず。佐々木君訪問菓子を投惠す。

九月四日 晴

此日は一日臥床飯を食ふ能はず。何事も成すなく、碌々床上にあり。晚佐々木君訪問キナエン薬を貰い飲みたり。前に曾根君より下痢薬を戴き兩三度服したり。時々大便あり。

九月五日 晴

此日より咳嗽し熱氣は散したる様子に食氣も進みたれば、晚上領事館迄散歩したり。遠隔なる故苦しかりし。婦には車に上れり。

九月六日 晴

夜洗澡に行しに大に心地清々して爽かなりき。咳嗽未た已ます。

九月七日 晴

十時曾根君の友 氏と共に医院に行き診察を請ひ薬を取り帰る。此夜熱出て咳嗽甚し、曾根君より戴きたるキナエンを服し寝に就く。

九月八日 晴

九月九日 同

別に変りたることなし。病院に行き薬を取り来る。此夜領事館に散歩す。前日の如く苦しからず。

九月十四日 晴

北京より前田氏、鳳文館来津、与に天津城を見る。大官の葬式ありたり。此夜新南陞にて上海に帰る。家君より信あり彼地の模様を知るを得たり。此頃は冷氣大に増し朝夕は夏衣にては寒し。

九月十六日 晴、冷

是より先き予か回教徒とならんと欲せしや同教劉氏に托したるに、此迄日本人回教徒となりたる例なし、因て議員集會にて之を決し報すへしとの事なり。事の決する一ヶ月内にあるへしと。予其の因循日を費すを悲む。

九月十九日〔あるいは、「十七日」とすべきか〕 晴

午後回教劉氏一回友を伴ひ来る。乃ち書を呈し意を述ぶ。彼大いに嘉焉、亜刺比亜語二十八字及別に十二を書し与えて去る。

九月十八日 晴

法軍艦アスヒック *Aspic* に水師提督レスヘー乗込外、サキテール *Sagittaire* 法領事館前に泊す。此日白須君家君の処に送信、此より先き温卿より来信大に冤を陳ふ。曾根君の旨を以て之を慰めやれり。家君に返信す。

九月二十日 晴 日 八月十二日

此日午後同寓預〔豫〕君と天津北門外に遊ぶ。繁華雜踏大厦巨家比軒、大に城内と看を異にす。蓋し天津の銀座街ならん、古着店、洋物店、皮衣裳、皮舗等目立ちて見へし。上海牟田氏より回信ありたり。

九月二十二日 晴 火 八月十四日

此日亦施医院に行く。四五日前より耳朶裡朦々朧々たるを以て藥を請ふ。医乃ち耳辺に膏藥を貼せり。其後腫れ爛れたる様。咳嗽未だ全快せず。諸病身を犯す、心の弱りたるに有らねども身の閑に乗したるものにや。牟田氏に書を送る内に、大浦氏への送信あり。曾根君の用、榎本公使出発す。公使は十六七日頃に來津あり帰国とのこと。何の為めか呉欽差か來訪し、李中堂の宴にも赴きしと。

九月二十三日 快晴 水 八月十五日

這日は八月十五夜に当れば、早朝店内に於て燈を点し種々の供物あり。午後満身粟を生し寒氣催したれば夜具引かつぎ温めたりしに、發熱し身体揺々不舒服なりし。晩方に至り大に好し、店主の夕餐の饗応あり、満腹運動

に出つ。此夜朦朧陰翳、十五夜の好景を欠きたり。惜しむへし。深更に及て明月高く照し心身爽快なりき。

九月二十五日 晴 金 八月十七日

病氣全く癒へたるを以て医院に行き之を謝し薬価を問ひしに、医曰、此医院李鴻章及び大官の人々の捐金に成り貧者に施すものなれば錢を要せずとのこと也。若し強て錢を出さんとならば之を貧者に施すべしとて捐金簿を出し見せたり。

九月二十六日 晴 土 八月十八日

這日早朝李鴻章船にて上京したる趣なり。曾根君に従て天津に赴く。伍廷芳を訪ふ。又種々東西を買ひたり。歸路三義砲台、仏耶蘇教堂を車上より望む。

九月二十八日 晴 月 八月二十日

早朝大院君鎮遠号にて帰国、袁世凱従焉、外数名米人亦随焉。

九月二十九日 晴 火 八月二十一日

此日牟田君に送信、内宗像君に送る書を含む。木炭のことに付丸屋の端書を添ふ。東京畠山君に送信、上海に在り〔し〕時来信あり、此即返信。

九月三十日 朝曇、午烈雨、夕晴 水 八月二十二日

此日朝下痢甚し、臥床暖を取る。漸くにして治す。晚佐々木氏より書を送れり、氏も亦劇痢なりと。因り之を訪ふ。

九月中記事

此一ヶ月は、身体不快薬を飲む二十日許、臥床四五日、或は下痢或（は）頭痛、心身爽快なることなく、事を為すに懶し。独り一小室に起臥し、看る所は語学の書及四書に過ぎず。夕暮常に遊歩佐々木氏の処に至り、故郷の事を談し又は世上の事を話し僅に客心を慰むる耳。始め予の上海を発するや、着津直に回教寺に行くを得んと。不幸病に罹り且つ彼れ未だ外人を入れる、例なし、会議に付し可否を報せんと。其後遷延之を待つ一日千秋の思ひ有りし、未だ以て報を得ず。此一月を空く瞬間に費したり。而して曾根君の恩恵を蒙る尤も厚し。予の上海に來りしより直に身を寄せ今に至る、一事も其恩に浴せざるはなし。皆な其給を仰ぐ。天津に來る身一錢の貯へなし。君乃予か為めに巨費を出し食せしむ。而して予か為めに周旋至らざるなし。誰か其恩に感せざらん。誓て涓埃の報を効さるべからず。之を此に記し以て後日に備ふ。

上海を発する時残暑未だ焼くか如くなりしか、着津旬日を経大に涼快、秋風蕭々朝暮冷涼夏衣堪へず。

予か上海を発するに臨み、友人宗方君予を送るの詩あり、乃ち左に録す。氏は熊本の人にして上海に相遇し顧蓋の思あり。人と為り慷慨有古烈士之風持心忠誠、蓋亦有志之士。

送石川君伍一之天津

羈客從來忙送迎。今日別君君何之。長風一帆万重浪。撚髯悠然捨我馳。
男兒衆散如萍跡。会者定離今何疑。独怪人生窮与達。君事鵬遊予困羈。
如今畢竟無用客。下愚於今未曉痴。自笑壮志堅於鉄。青山何処拳我卮。
回首世事多變易。邦家前途使人悲。鵲蚌所爭魚人喜。顚叟蕭牆兩忘思。

勸君及時須研勵。丈夫報國豈顧危。文墨弄世士所恥。只當秣難固皇基。

君不見腥風捲潮東溟水。

鯨鰐吼月驚迎睡。鳥々之歌君休唱。却使憂士不益怡。別後只須長自愛。

暴馮危身君勿為。他年春風花紅路。匹馬尋君話旧時。

十八年第八月念一於上海客舍

東肥 放浪子 冲天

石川君伍一北奧秋田之人也予之於君非有紙鷲竹馬之素乙酉卒然相逢于申浦之浜一見如故旧頗得相尽矣君為人忠實欣立志於天下之務今茲乙酉八月將游津沽予即賦七言古風十四韻送其行云

放浪子 宗方大亮 謹記

十月一日 晴 木 八月二十三日

此日朝來下痢の氣あり、臥床暖を取る。劉先生より久く報なきを以て、曾根君予を張先生に托し暫く寄寓せんとす。其後予張先生を訪ひ其答を得んとせしに、張氏自ら來り答ふべしと此夜張氏來り曾根君に謂て曰く、暫く劉氏の答を待つべし、且つ日本人を寓する人言を免れず、服裝を変せざるべからす云々。因て禮拜日に曾根君と劉氏を訪ひ其報を得んとす。

十月三日 晴 土 八月二十五日

此日北京より岸田の書籍を売るに派出したる牧野氏及大工一人支那人来津、同昌に投す。此夜重慶に上る。

十月四日 晴 日 八月二十六日

前十時法教会堂に於て法人の説教ありと聞き、豫君と行き見る。堂内莊嚴寂人無し。之を問ふに、已に完れり後三時来るべしと。

此日曾て曾根君と劉先生を訪ふ筈なれども、曾根君頭疼不果行、予文雲を従へ駟に乘し行く。生れてより始めて騎駟極て乗り心地好し。劉先生在家筆談数刻反復論弁するも不如意而帰。筆談別紙に写す。

十月五日 晴、朝曇 月 八月二十七日

此日張氏の寓に到り將に借居の事を定めんとし、曾根君に問ふ。君曰く信来れりと。出し之を示す。即母堂の肯ぜざるに因て置く能はずと。予豈に失望せざらんや。氏始め与に同居換語せんと謂ひしを以て信して疑はざるなり。其齟齬する亦天なり。因て曾根君、佐々木氏を呼び共に謀る、領事に托し電報学堂に入らんとす。成否を期する能はず。

佐々木氏の銅至る。

十月六日 晴 火 八月二十八日

午下豫君と仏軍艦に至り之を見んことを請ふ。士官曰く任意散歩すべしと。艦はガンボートにして四砲を備ふ。中間二砲は長二間許にして口径二十四センチメートル〔ママ〕、前後は長一間余にして口径十センチメートルなりと云ふ。皆仏式 砲なり。右腹にホーチキス銃の如き五連発の者を備へたり。銃なりと云ふ。蓋し水雷船を防く者。

十月七日 晴 水 八月二十九日

東京舎弟より返信達す。

十月八日 晴 木 八月三十日

牟田君より返信達す。是より先き電報学堂に入るを謀らん（と）せしも、二三年の間束縛せられざるべからず、其資を給するの道なし。且つ事実後慮あり下辺の同昌工跟班に入らんと欲し、曾根君之を趙掌櫃に謀りしも行はれず。其意味を聞くに、朝鮮事変以後官日人に注目すれば、之を寓する後日の禍を恐るなりと。乃ち復た議し仏国教会に入らんとす。下痢三度。舎弟への返信を曾根君に托す。東君へ送る信を包む書籍の事外数件。

十月九日 晴 金 九月一日

是より先き嘗て佐々木氏河東機器局に約売せし硫黄十万斤着し、此日引渡し量重（ママ）を秤る。余行き助く朝より暮に至る。佐々木氏の西洋料理の夕餐に預る。此夕洗澡に行く。満腹。

十月十日 晴 土 九月二日

此日晨より下痢床に臥し暖を取る。晡に至て已ます、下すこと十度薬を飲む三度、全く昨夜満腹未だ消化せざるに冷せしに因るなり。

十月十一日 晴 日 九月三日

此日も不舒腹、臥床に至らず。

十月十三日 前霄 火 九月五日

午時陰埋天暗、將に雨らんとして雨らず。猛風大に起り黄塵空を蔽ひ寒甚し。外出する能はず。父君の書を拝

す。

十月十五日 晴 木 九月七日

此頃冷氣日に増し寒に堪へず。先きに曾根より亜細亜協會報告を托され、商況取調に付二三日忙しかりし。不案内故不便なりき。家君に書を送る。

十月十六日 金 九月八日

此日午下曾根君予か為に衣服を買はんと天津に至る。馬褂子、褲子及長衣を買ふ。

十月十七日 土 九月九日

此日張先生至り天主教師に告けたるを以て、明後月曜共に行き神父に面会し請ふべし、之を諾す。

十月十八日 日 九月十日

此日辯子鞋襪等を買〔ひ〕、剃頭換衣中国人と為る。店人皆笑て能く像似するを称す。曾根君の恵なり。

十月十九日 月 九月十一日

此日午前張氏と約あるを以て張氏の宅に至る。張氏の家族見て語の通せざるを以て南辺人と為し、氏至るに及び遂に大笑したり。曾根君張氏と同伴天主教会に至り、支那人に面し神父を見るを求む、神父在らず。曾根君先歸、後を予筆記略其意を述ふ。彼れ其意を取るも、居処なし通学すへしと云ふ。応接之間支那人に托して事を為すべからざるを悟り直に□の神父に面し意を述べんとす。然るに語の通せざるに困し歸り、之を曾根氏に図る。

曾根氏曰く、法教会に於て英語を話せず、聞く佐々木氏神父を識れりと、共に行き托すべしと。乃ち佐々木氏に請ひ共に至り待ち一会見にして面す。神父予等に英語を話し得るやと。予等固より英語を話す能はず支那語を以

です。彼此相交せず、乃ち前の支那人を呼び余か書せし意を代陳せしむ。而るに彼れ充分我意を述べず。神父予に云ふ、汝国天主教あるへし。奉せんと欲せは帰国之を奉すへしと。遂に我意を通する能はざるを察し、明日曾根君に請ふて同伴し其意を貰かんとし、明一時を期し帰る。後此を曾根君に請ふに君諾せり。其後亦曰く、聞く佐々木氏知る所の神父今上海に在之周日を経て帰るべし、其時徐ろに計るべしと。徒に蔑視を受くる勿れと（前に予等行き神父を見し□蔑視の風ありたるを以てなり）。

小田切氏父の病を以て北京より帰る。此夜船に上る。

十月二十一日 水 陰、午下少雨、夜明月皓々 九月十三日

天津輸出入の取調終る。二三日を費す。（税関貿易表より訳出）之を佐々木氏に贈る。豫君と共に復天主教堂に至る。神父に面し漸く少く解するを得るも、彼れ疑なき能はず。故なくして突然行て之を依頼す、彼安ぞ信せん。其の窮し食を得んか為めに入教し、熱心奉教する者に非ずと考るは常情なり。故に古語夜光璧無因而到人按劍而立。彼曰く、当時教会内役員満ちて置くべきなし、汝若し教を奉せんと欲せば、暫く糊口の道を求め来るべしと。乃ち帰る。此夜佐々木氏新南陞にて上海に赴く、之を送る。

閔泳弼英国に遊学する為め武昌にて上海に行〔く〕。

十月二十二日

李鴻章北京より回る。李鳳包同道。

十月二十五日 日

此日仏天主教堂に行く。経を念し樂を奏し以て天主を拝し万福を祈るなり。信奉を厚くし彼の信用を得んとす

るに在り。

十月二十七日 火

郷里安保父より返簡を領す。曾て上海に在りし時の書に答ふるなり。

十月三十日 金

此日前七時当地遊学生小林福之助氏熱病に罹り死す。此より先き一月許風心地とて臥し、熱有りたる由なるか服薬し快氣に赴しか、十日前に熱甚しく後食も不為、西人医に見せたれども別に熱を治する薬なしとかや次第に身体も衰弱し、初めは支那客棧に在りしか後領事館に引越。領事初め親切にし友人武藤氏は始より能看病したりしか、一兩日前より様子変り常に鬼の迎に来るか如き事を口走りしとかや、遂に無敢黄泉の客となれり。氏年二十五、慶應義塾卒業生なり。誠に可惜事たりし。午前行き弔ふ。

十月二十九日

此日より三十一日に迫る三日間競馬あり。此日は風甚たしく行見を果さず。三十日午後二時頃より行見る。西南門外平闊の地に在り。

十月三十一日 土 晴

這日五時小林君の葬式あり、西人墓地に葬る。米人新教僧を乞ひ念経す。墓は英仏連合兵撃清の時死せし者の墓の前に在り。

此十四五日頃佐々木氏より皮衣服を恵せられ、馬褂子を造る。費皆な氏に出つ。襦袢も恵与せらる。

十月中記事

異事なし、只身を処するに奔走従事せり。回教徒に行き談ず不行、寄寓を張氏に托す亦齟齬。同昌に入るを謀る不出来。仏教会に入らんと欲し、再ひ至て不被入。豫君の僕と為らんとせしも曾根君不許。常に自ら食らんと欲し種々考思、書を読むも心此に在らざれば記憶せず。自ら戒め、志士時に随ひ優に余裕あるべしと思ひ直せども、独立独行刻苦の念盛んに誠に猥らに徒に人の恩を貪らざらんとせるなり。時に前途を考へ又其周遊の法を思ふ。時としては意故山に在り、常に家君の伸業を祈れり。

此月の著事は乃ち予か剃頭換衣支那装に改めたることなり。此乃ち予か清国に従事するの始門なり。教師を請するを得ざるを以て張は云、孝行なる同昌の跟班あり。之と話すれども彼れ字を解せざる故不便なり。

支那装都て曾根君の賜なり。